

ヴァージニア大学の滞在を終えて

高知工科大学総合研究所制度設計工学研究センター 助教

小宮あすか (こみや あすか)

幸いなことに、私は二つのフェローシップのオファーを同時期にいただきました。一つは民間のアクサ財団のポスドク用のフェローシップで、神戸大学を受け入れ先として申請したものでした。もう一つは日本学術振興会の海外特別研究員という制度で、ヴァージニア大学を受け入れ先として申請したものでした。しかし、どちらのフェローシップも同時に受給することはできないので、どちらかを選ばないといけません。「海外に長期滞在できる機会は就職前の今しかないだろう」という現実的な問題と、「一度しかない人生なら広い世界を見てみたい」という好奇心、さらには神戸大学の先生方の優しい励ましと後押しを得て、ヴァージニア大学での研究生生活を始めることにしました。

ヴァージニア大学心理学部の社会心理学コースは、ティム・ウィルソン、ジェリー・クローア、ブライアン・ノゼックという社会心理学の各分野の著名人が在籍する、全米でもトップクラスのコースです。その中のひとりが、私の受け入れ教員である大石繁宏先生でした。大石先生は、社会環境や自然環境がどのように人のところに影響するのか、そしてそのような影響を受けた人のところがどのように環境に影響し返すのかを検討し、環境とところの相互作用過程を明らかにしようとする社会生態学的アプローチの第一人者です。私の研究関心はまさしく社会生態学的アプローチにあったため、大石先生のもとで研究を進めること

は非常に良い機会であり、議論や共同研究を通じてさまざまな素晴らしい知的経験を得ました。

大石先生の研究の特徴のひとつは、オリジナリティあふれる調査や実験です。たとえばある論文では、幸福感の意味の歴史的な遷移について「辞書での記述を調べる」という方法を、また他の論文では向社会的行動の指標として「地域の環境保全のための寄付ができる車のプレートの売れ具合を調べる」という面白い方法をとっています。実際、先生のゼミでも、「これを調べてみれば？」と思いきやかけない調査対象がぼんぼん出てきますし、「こういうデータがある」と自分の知っているデータを教えてください。先生の発想の自由さにつられて、ゼミに参加している院生たちからも豊富にアイデアが出てきていたのも印象的でした。

また、大石先生の研究のスピードは非常に速く、彼には1日36時間あるのでは、と思うほどでした。論文の処理スピードは特に速く、「2週間で返す」と言われた論文が2日で返ってきて、「締切を逆方向に破るとは！」と焦ったこともあります。話を聞いていると、仕事の順位つけ方のうまさや、切り替えの早さがポイントのようなのですが、結局、その秘訣はわかりませんでした。今のところ、大石先生を真似して、私のパソコンでは常に論文のワードファイルが開きっぱなしになっています。

そのほか、「世界はつながっていること」を意識できたことは、



Profile—小宮あすか

2011年、京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。京都大学大学院教育学研究科研究員、神戸大学大学院人文学研究科特命助教、ヴァージニア大学心理学部客員研究員を経て、2014年より現職。博士（教育学）。専門は社会心理学・文化心理学・認知心理学。

海外の研究生生活の中で得た一番大きな経験だったように思います。当然じゃないか、と思われるかもしれませんが、渡米以前の私にとって、*Nature*や*Science*、*Psychological Review*や*JPSP*などの分野内外の一流誌は、どこか「自分とは別の世界に住む誰かが書いたもの」という印象でした。しかしヴァージニア大学の心理学部では、院生が一流誌に論文を投稿し、実際に掲載されるのが日常でした。もちろん言語のアドバンテージは大きいと思います。ただ、そうした一流誌に論文を書くことは別に異世界の出来事ではなく、自分の進む道の先に確実にある選択肢のひとつであることを改めて認識できたように思います。

もちろん海外での生活には大変なことも多かったのですが、ヴァージニア大学への滞在は非常に刺激的で実りの多いものでした。世界の広さと狭さを胸に、チャレンジする気持ちを常に持って、今後の研究生生活も進めていきたいと考えています。